

令和4年第1回県立高等学校将来構想審議会 会議録

日 時 令和4年8月23日(火) 午後2時から午後4時まで

場 所 宮城県行政庁舎 9階 第一会議室(宮城県仙台市青葉区本町3丁目8-1)

出席委員(16名) ※欠席委員なし

浅野直美委員 伊藤宣子委員 伊藤秀雄委員 猪股智秋委員
葛西利樹委員 片瀬弥生委員 菊田英孝委員 菊地直子委員
後藤武俊委員 佐々木克敬委員 佐藤新一委員 庄子真岐委員
鈴木洋委員 田端健人委員 千葉真己恵委員 本凶愛実委員

傍聴者(2名)

宮城県教育委員会関係者

伊東昭代(宮城県教育委員会教育長)
遠藤浩(宮城県教育庁副教育長)
高橋拓弥(教育企画室長)
鏡味佳奈(教職員課長)
佐々木利佳子(義務教育課長)
遠藤秀樹(高校教育課長)
市岡良庸(特別支援教育課長)
熊谷幸一(施設整備課長)

司会

本日は、お忙しい中、御出席をいただき誠にありがとうございます。定刻となりましたので、「令和4年度第1回県立高等学校将来構想審議会」を開催いたします。

会議に入ります前に、本日は気温が高くなっておりますので、上着をお取りいただいたり、適宜水分を補給するなどの対応をよろしくお願いいたします。

初めに、会議の成立について御報告を申し上げます。

本審議会は16名の委員で構成されておりますが、本日は、全委員の皆様に御出席をいただいております。

県立高等学校将来構想審議会条例第5条第2項の規定により、過半数の委員の皆様に出席いただいておりますので、本日の会議は成立しておりますことを御報告申し上げます。

なお、本会議は、前回に引き続き、公開により開催することとしますので、御了承願います。

続きまして、開会に当たり、宮城県教育委員会教育長 伊東昭代から御挨拶申し上げます。

伊東教育長

皆様こんにちは、宮城県教育委員会教育長の伊東でございます。

開会に当たりまして、一言御挨拶を申し上げます。

委員の皆様には、大変御多用のところ、そして暑い中、御出席をいただきまして、本当にありがとうございます。

また、皆様方には日頃から本県教育の充実・発展のために、御指導、御協力を賜っていることに、この場をお借りして厚く御礼申し上げます。

今回は県立高校の将来構想の審議会でございますが、県内の高校ということで、昨日、仙台育英高校が甲子園で優勝するという素晴らしいことがあって、その余韻もありながらの会になろうかと思えます。

県教育委員会では、平成31年度から令和10年度までの10年間を計画期間とする「第3期県立高校将来構想」及びそのアクションプランである「第1次実施計画」を策定し、現在、高校教育改革の取り組みを進めているところです。この中からテーマを絞って色々と御意見をいただきたいと思えます。

今年1月に開催した審議会では、現在検討を進めている「新たなタイプの学校」のイメージをお示しし、様々な御意見を頂戴したところであり、委員の皆様には改めて感謝申し上げます。

「新たなタイプの学校」については、今さらに検討を深めているところです。11月頃に予定している今年度第2回目の審議会において改めて皆様から御意見をいただきたいと思えますので、どうぞよろしくお願いいたします。

本日は、いわゆる小規模校における学びの在り方について、「第3期県立高校将来構想」や「第1次実施計画」などを踏まえた小規模校の基本的な考え方をお示しつつ、小規模校の課題やそれに対応した取組等の方向性について、私どもの考え方を説明させていただきたいと思っております。

少子化の中においても、高校で学ぶ子どもたちに活力ある教育環境を提供していけるよう、委員の皆様には、幅広い観点からの忌憚のない御意見を賜りまして、今年度予定しております第2次実施計画の策定に生かしながら、生徒が意欲的・自立的に学ぶことができる学校づくりにつなげてまいりたいと考えております。

本日はどうぞよろしくお願いいたします。

司 会

続きまして、前回、所用のため御席されておりました2名の委員を御紹介いたします。

学校法人朴沢学園仙台大学体育学部 教授 菊地直子委員です。

宮城県高等学校長協会 会長 佐々木克敬委員です。

続きまして、令和4年4月1日付けの人事異動に伴い、宮城県貞山高等学校前校長の石川俊樹委員に替わり、令和4年6月1日付けで、審議会委員をお引き受けいただきました委員を御紹介いたします。

宮城県美田園高等学校 校長 菊田英孝委員です。

それでは、議事に移らせていただきます。

ここからは、本図会長に議事進行をお願いしたいと存じます。

本図愛実会長

皆様本日はどうぞよろしくお願い致します。

早速議事に入りたいと思えます。

議事（1）小規模校における学びの在り方について、事務局から説明をお願いします。

事務局（教育企画室）

教育企画室の室長をしております高橋と申します。本日はどうぞよろしくお願いいたします。着座にて御説明いたします。

それでは、議事（１）の「小規模校における学びの在り方について」ご説明いたします。資料１の１ページを御覧ください。

はじめに、「１ 検討に当たって」といたしまして、今回、本審議会でテーマとして取り上げることとした背景等について説明いたします。

県教育委員会が平成３１年２月に策定した「第３期県立高校将来構想」においては、学習活動や学校行事の充実などの観点から、活力ある教育環境を確保するため、全日制課程の適正な学校規模の目安を１学年４から８学級としているところです。また、「第３期県立高校将来構想第１次実施計画」では、適正規模を下回る学校について、速やかに再編の検討を進めることとしております。

一方で、「第１次実施計画」では、１学年２学級及び３学級規模の学校は、当面、特例校として存続することとしているほか、地域の実情を踏まえて分校化する選択肢も示しており、特に地方部において小規模校が一定程度存在している状況でございます。

また、地理的な要因や地域において学校が果たす役割など、各学校が置かれている状況は様々であり、個別の地域事情を考慮した検討を行うことも必要であると考えております。

小規模校に関する基本的な考え方としては、「第３期県立高校将来構想」で示している４から８学級を適正な規模の目安として教育環境を確保していくことを基本としながら、再編等の検討に当たっては一律に再編することを前提とするのではなく、地理的な要因や地域において学校が果たす役割など地域の実情に応じた検討を行っていく必要があると考えられます。

こうした中で、令和３年１月の中央教育審議会の答申においては、「小規模な学校では単独で児童生徒の多様なニーズの全てに応えることは困難」であることや、「様々な教育資源を活用することによって小規模校単独ではなし得ない教育活動を行うことが求められている」ことが示されており、本県においても小規模校の学びの在り方を検討する必要があると考えております。

資料１ページの下段に参考として記載しておりますが、県内における全日制の県立高校６５校のうち、いわゆる小規模校は１６校となっており、中部地区と石巻地区を除けば、約半数の県立高校が小規模校となっている状況でございます。

次に、資料の２ページを御覧ください。「２ 小規模校の良さ（魅力）と課題」について御説明申し上げます。

小規模校の学びの在り方を検討するに当たり、小規模校の現状や課題等を把握するため、当室において、県内の全ての小規模校を対象としたアンケート調査を実施いたしました。

調査方法としては、小規模校における「良さ（魅力）」や「課題」等について、学校は自由記載、生徒と保護者は選択形式により、回答をいただきました。

以下、アンケートの主な項目と回答を抜粋した形で説明させていただきます。はじめに、学校の調査結果について説明いたします。

まず、（１）小規模校の良さ（魅力）として、「生徒同士、又は教員と生徒間の距離感が近いこと、お互いの信頼関係を構築しやすいことや、「全校による活動や様々な取組を企画しやすいほか、地域に根ざした活動ができる」ことなどが挙げられました。

次に、（２）良さ（魅力）を生かすために工夫していることとして、「生徒一人一人に役割を与え、自分達で目標に向かって活動するよう取り組ませていることや、「地域行事やボランティア活動に参加するなどの活動を通して、生徒の社会性の育成や高校の存在が地域の活力維持に繋がるよう取り組んでいる」ことなどが挙げられました。

(3) 課題つきましては、「生徒の興味・関心や多様な進路希望に応じた幅広い科目の開設が難しい」ことや、「人間関係に広がりがなく、多様な価値観や意見に触れる機会が少ない」こと、「部活動や学校行事の内容が制限され活性に欠ける」ことなどが挙げられました。

また、(4) 課題を改善するために工夫していることとして、「様々な個性や多様な価値観に触れるため、地域と連携した学びや、外部講師による授業を行う」という回答のほか、「部活動において、兼部制や他校との合同実施により部活動の選択肢を広げている」などの回答も見られました。

次に、資料3ページを御覧ください。生徒と保護者の調査結果について、説明させていただきます。

はじめに、(1) 小規模校の良さ(魅力)についてでございますが、生徒と保護者の合計では、「②教員と生徒の信頼関係が構築しやすい」、「①生徒間の信頼関係や相互理解が強くなる」、「④生徒一人一人が活躍する場が多い」の回答割合が高く、学校の回答と同様の傾向が見られました。

次に、(2) 小規模校の課題として、生徒と保護者の合計では、「①人間関係が固定化しやすい」、「④部活動の選択肢が少ない」、「③学校行事や生徒会活動の活性に欠ける」の回答割合が高く、こちらも学校の回答と同様の傾向が見られております。

今回実施したアンケート調査のまとめといたしましては、小規模校は、学校行事等において生徒一人一人に活躍の場がある点、地域に根ざした活動がしやすい点などの良さはあるものの、生徒の進路希望等に応じた幅広い科目の開設が難しい点や、多様な価値観や意見に触れる機会が少ない点、部活動や学校行事の内容が制限され活性に欠ける点など、小規模校単独では、活力ある教育環境を確保する上での課題も多いことが明らかになったと考えております。

次に、資料4ページを御覧ください。「3 小規模校における取組や運営上の工夫」について説明させていただきます。今回のアンケート調査を踏まえた主な課題と、それに対応する様々な取組や運営上の工夫について、表のとおり整理しました。

1つ目の「生徒の興味・関心や多様な進路希望に応じた幅広い科目の開設が難しい点」につきましては、「ICTを活用した遠隔教育システムの導入による学習環境の充実」を図ることが考えられます。

2つ目の「多様な価値観や意見に触れる機会が少ない点や、コミュニケーション能力を育むことが難しい点」については、「地域等との連携による学習活動の充実や多様な交流機会の創出」を図ることが考えられます。

3つ目の「生徒のニーズに応じた部活動の開設が難しい点や、学校行事が小規模となり活性に欠ける点」については、「学校間連携による課外活動の充実」を図ることが考えられます。

以降、具体的な取組や工夫の内容について説明させていただきます。

資料5ページを御覧ください。「(1) ICTを活用した遠隔教育システムの導入による学習環境の充実」について、説明させていただきます。

小規模校においては、教員数が少なく、生徒の興味・関心や多様な進路希望に応じた幅広い科目の開設が難しいことから、ICTを活用した遠隔教育システムの導入により、学習環境の充実を図ることが考えられます。

現在、本県では、遠隔授業の教育体制、いわゆる「みやぎDUAL-COREハイスクールネットワーク」の構築を進めており、本事業で構築したネットワークを活用し、配信科目の増加や参加校の増加を推進するほか、遠隔授業を必要とする高校が利用できるよう全県的な運用を目指しております。

本事業においては、岩ヶ崎高校、中新田高校、柴田農林高校川崎校が参画しており、他の小規模校への導入についても引き続き検討してまいります。

資料5ページ目の下の段には、「みやぎDUAL-COREハイスクールネットワーク」の概要図を掲載しておりますので、参考にいただければと思います。

次に、資料6ページを御覧ください。こちらはICTを活用した遠隔授業のイメージを記載しております。上の表につき

ましては、現在、「みやぎDUAL-COREハイスクールネットワーク」で実施している内容で、授業配信校から各学校へ配信する形式となっております。

下の表につきましては、学校間で生徒の進路希望等に応じた授業の共有・補完をする双方向配信の形式をイメージしており、本県においても将来的な双方向配信での実施を想定しながら、今後検討を進めてまいりたいと考えております。

次に資料 7 ページを御覧ください。「(2) 地域等との連携による学習活動の充実や多様な交流機会の創出について」でございます。

小規模校では、人間関係に広がりを作ることが難しく、多様な価値観や意見に触れる機会が少ない点、コミュニケーション能力を育むことが難しい点などの課題があることから、地域の協力による体験的な学習の充実や外部講師の招へいなど、地域等との連携をさらに推進することにより、学習活動の充実や多様な交流機会の創出を図ることが考えられます。

資料 7 ページの下の段には、地域等との連携イメージを記載しております。

次に、資料 8 ページを御覧ください。地域等と連携した取組として、志津川高校の取組例を紹介させていただきます。

志津川高校では、県内唯一の地域連携型中高一貫教育校として、中学校への乗り入れ授業や学校行事や部活動の連携など、南三陸町唯一の高校として、町立中学校と連携した教育活動を展開しております。

南三陸町が開設した無料で利用できる公営塾「志翔学舎」では、基礎から大学受験まで段階に応じた学習支援に取り組んでおります。

また、実践的な起業家教育として、企業との連携により、ペヤングやきそば「たこめし風味」、「わさび醤油味」の全国発売などの活動を実施しております。

さらに、日本の高校では初となる「リナックスアカデミーパートナープログラム認定校」として、IT 企業の社員が情報ビジネス科で授業を受け持ち、リナックスを学んで資格取得を目指すなど、「プログラミング教育」の充実を図るための取組を実施しております。

これらの取組のほか、令和 5 年度からの全国募集を契機に、「普通科」において、「地域学」や「地域探究学」などの学校独自の科目を設置することとしており、引き続き、地域と協力しながら、地域の活性化と自己実現を両立した学びを目指した取組をより一層推進していく予定でございます。

次に、資料 9 ページを御覧ください。地域等と連携した取組として、その他の取組例を紹介させていただきます。

多賀城高校では、津波標識の設置活動や伝承活動としての被災地域「まち歩き」案内活動などに取り組んでいるほか、中高生の交流による防災リーダーの養成に取り組んでおります。

中新田高校では、総合的な探究の時間において、加美町の自然・人口・産業について、現状と課題の理解を深める「加美町研究」を実施しているほか、加美町のイベントやボランティア活動など、多くの場面で加美町と連携して取り組んでおります。今後は、IT 企業との包括連携協定により、デジタルコンテンツ制作、HP やアプリの開発、ドローンの活用法など、デジタル人材の育成を目指した授業を展開する予定でございます。

石巻西高校では、総合的な探究の時間において、地域の社会人を講師として招き、インタビューを行う「ミライブラリー」を実施しているほか、地域理解講座「街クエスト」では、地域の事業所や NPO 団体に生徒が出向き、講義やフィールドワーク等を通して地域の産業や課題について理解を深める活動を行っております。

次に、資料 10 ページを御覧ください。(3) 学校間連携による課外活動の充実について説明させていただきます。

小規模校では、部活動や学校行事の内容が制限され、活力に欠ける点等の課題があることから、学校間連携により、多様な交流機会の創出、学校行事や部活動の充実を図ることが考えられます。

学校間連携のイメージを記載しておりますが、単独校同士の連携による、芸術鑑賞会等の学校行事の合同開催

や部活動の合同チーム編成などにより、充実した学校行事や部活動の実現を図ることが考えられます。

以上、小規模校の課題とそれに対応する取組や運営上の工夫について説明させていただきました。小規模校においては、課題に対応した様々な取組や様々な運営上の工夫が考えられ、学校や地域の実情に応じて最も適切な取組を講じるとともに、必要に応じて複数の手法を組み合わせながら、学校全体で取り組んでいく必要があると考えております。

以降は参考資料となりますが、資料1 1ページでは、冒頭で説明した令和3年1月の中央教育審議会の答申の抜粋を掲載しております。

資料1 2ページ、1 3ページは、国の「新しい時代の高等学校教育の在り方ワーキンググループ」による令和2年1 1月の取りまとめ結果を掲載しております。

資料1 4ページは小規模校の生徒の在籍状況を掲載しております。

第3期県立高校将来構想に掲げる「未来を拓く魅力ある学校づくり」を実現していくために、委員の皆様から様々な御意見をいただいた上で、引き続き小規模校の学びの在り方について検討してまいりたいと考えておりますので、どうぞよろしくお願いいたします。

私からの説明は以上になります。

本図愛実会長

ありがとうございます。ここからは皆様から御意見をいただく場となっておりますので、ぜひ御質問も御意見もお願いしたいと思いますが、いかがでしょうか。

後藤武俊委員

お示しいただいた方向性は非常に重要なことですので、基本的な方向性は非常に良いと感じました。

ただいまの説明に対して3点質問させていただきます。

1点目ですが、今説明いただいた資料1の5ページ、「みやぎDUAL-COREハイスクールネットワーク」ですが、非常に興味深くお話を聞かせていただきました。現在実施されている学校の活動を見ると、総合的な探究の時間が中心のようですが、資料1の6ページにあるような通常の教科における配信授業に広げていくことが最終的な目標だろうと思いますが、資料1の5ページの一番下のところを見ると、通常教科における配信授業は非常に少ないと感じました。広がらない要因があると感じましたので、通常教科に配信をベースとする授業を展開していく上での課題についてお聞かせいただきたいと思います。

2点目ですが、資料1の8ページの志津川高校の取組についても非常に興味深くお話を聞かせていただきました。この中で、一番上にある中高一貫教育は大変素晴らしい取組であり、町立中学校との縦の関係を有効に活用していると感じました。この活動による成果について伺いたいと思います。

3点目ですが、公営塾「志翔学舎」について、誰でも利用できるものなのか、それとも制限があるのか伺いたいと思います。

本図愛実会長

ただいまの御質問について、事務局いかがでしょうか。

事務局（高校教育課）

御質問いただいた「みやぎDUAL-COREハイスクールネットワーク」について、お答えいたします。本事業は昨年度から来年度までの3年間、国の指定を受けて実施しているものでございます。

主に、都心部から郡部の小規模校へ授業等を配信すること、小規模校の中で学校の活力を維持していくために、コンソーシアムを形成して、地域との連携を強固にしていくことの2つを目的に実施しているものでございます。

昨年度はネットワークの構築と機材の導入に力を入れてまいりまして、本年度から本格的に授業の配信を進めているところです。

御質問のありましたとおり、資料1の5ページの図の中には、総合的な探究の時間の記載がありますので、そこがメインと捉えられてしまうところがございますが、図の一番下にあるとおり、宮城野高校と田尻さくら高校の2校を配信校といたしまして、岩ヶ崎高校、中新田高校、柴田農林高校川崎校に授業を配信しているものであります。その例として、いくつかの科目を記載させていただいております。考え方としては、例えば、岩ヶ崎高校には、地学基礎という科目がありますが、地学の専任の先生が岩ヶ崎高校にはいらっしゃらない、そうした時に岩ヶ崎高校の子ども達に地学の学びを保障するためにこういったネットワークシステムを用いて配信する。あるいは、美術Ⅱという科目がありますが、美術Ⅰという必修科目があり、そこからさらに本格的に、専門的に学びたいという子ども達に対して、こういったネットワークを用いながら配信するものでございます。

現在、モデル的に宮城野高校と田尻さくら高校から3校に対して配信して実施しているところでございます。

御質問のありました課題についてですが、1つ大きなこととしては、配信する側としては負担が増えてしまうというところがございます。どうしても自分達の目の前にいる子ども達に対する授業を行うのと併せて、画面の向こうにいる子ども達をしっかりと見ないといけないということになると実際に授業を受け持つ先生の負担になってしまうことがあるかと思っております。

もう1つは評価の問題。高校にはそれ以外にペーパーテストもありますので、そのペーパーテストを行った評価をどちらで行うかという基本的には配信側が行うことになる。画面の向こう側にいる子ども達の評価を配信側の先生が行わなければならない。そういったところで、配信側の先生に若干の負担が生じてしまっているという課題はあるため、そういったところを少しでも軽減できるような形で検討できないかというところを意見を募りながら進めているところでございます。

葛西利樹委員

それでは、志津川高校の南三陸町との地域連携型中高一貫教育の御質問についてお答えします。

平成15年から始まり、この取組の中で一番大きいのは中学校への乗り入れ授業で、高校の数学、英語の教員が歌津中学校と志津川中学校に赴き、チームティーチングで授業を行っているところでございます。中学校での学習の状況、生徒がどのようなところで学習につまずきを覚えているか把握した上で、本校に入学してくる生徒の高校一年生からの指導について、スムーズに学習指導を展開することができるのが一番大きな成果と考えております。

特に、中学校時代に教わった先生が高校にも居ることが生徒にとっては高校に入ってから安心感として得られております。志津川高校の生徒の約90%は、連携中学校である2つの中学校から来ており、そういったところでも、高校に入学する不安が解消された状況で安心して学べる環境ができているというのが大きな成果でございます。

また、公営塾「志翔学舎」についてですが、生徒の利用については無料で、特に制限は設けていないところでございます。

本図愛実会長

ただいまの回答に対して、後藤委員いかがでしょうか。

後藤武俊委員

ありがとうございます。志津川高校の取組について非常に興味深く伺いました。

「みやぎDUAL-COREハイスクールネットワーク」については、評価の部分が課題になるだろうというつもりでお伺いいたしました。広げていく上で、重要なポイントとなりますので、ぜひ慎重に進めていただきたいと思います。

本図愛実会長

そのほか御意見ございますか。

田端健人副会長

参考資料1「県立高校に関するアンケート調査結果について」ですが、こちらは大変貴重なデータかと存じます。こういった調査をしていただいたことに対しても御礼申し上げたいと思います。

個人的に深く印象に残ったのは、参考資料1の6ページに掲載されている問1です。これは、生徒と保護者に学校を選択する際に何を重視したか聞き取りしたのですが、「②自分の学力レベル」の選択が最も高く、これは学力がいかに関与しているのかということを知る一つのデータかと思えます。そして、参考資料1の7ページの問2、これは学校を選択した際にどのようなことを期待したか聞き取ったのですが、「③基礎学力の向上につながる学び」が生徒と保護者ともに2番目に回答割合が高くなっています。最も回答割合が高いのが「①就職に役立つ知識や技術に関する学び」で5割を超えており、半分以上の生徒と保護者が就職を考えながら、学校選択をしているのと併せて、就職を目指しながら学力を大事にしているということも非常に示唆的なデータかと思いました。

お伺いしたい点として、資料1の2ページと3ページの学校と生徒及び保護者の調査結果について、大体は一致していたのですが、少しずつあるところもあるのかなと感じておりました。3ページの良さ（魅力）では、「⑥の地域との連携が行いやすい」とか、「⑦多くの人と関わる必要が無い」の回答割合が低くなっており、課題では、「⑤教科・科目の選択幅が少ない」の回答割合も低く、生徒も保護者もあまり必要性を感じておらず、そこまでニーズがないように思われます。また、「⑧多様な考えに触れる機会が少ない」、「⑨社会性を育みづらい」の回答割合もそこまで高くはなく、学校の回答内容とずれが生じているように感じました。

小規模校に通学している生徒とその保護者は、小規模校においても、社会性やコミュニケーション能力を一定程度育まれている感触をお持ちなのかと思いました。そこからすると、資料1の4ページの「小規模校における取組や運営上の工夫」についてですが、3つ目の「生徒のニーズに応じた部活動の開設が難しい点」等については、学校、生徒と保護者の回答内容が一致していると思いますが、1つ目の「生徒の興味・関心や多様な進路希望に応じた幅広い科目の開設が難しい点」や2つ目の「多様な価値観や意見に触れる機会が少ない点」等については、生徒と保護者はあまり興味がなく、むしろ学校側の教育的な配慮の方が先に立っているのかなと感じました。その点についてはどのように分析されていますか。

事務局（教育企画室）

委員の御指摘のとおり、学校側のニーズと生徒と保護者のニーズは若干ずれが生じているところはあると思います。詳細の分析はまだしていない状況ですが、現実問題として、教科の設置に当たって、教員の数の問題もあって、やりたいのにやれない状況もございます。ほかの高校とのバランスなども見ながら、生徒のために教育内容を充実していくことが必要だろうと認識の下、小規模校における取組や運営上の工夫において、3つの区分で今回整理したということでございます。

田端健人副会長

ありがとうございます。その問題を解決する一つのツールとして、資料1の5ページにある「みやぎDUAL-COREハイスクールネットワーク」が示されておりますが、どのようなネットワークなのか内容を教えていただけますでしょうか。単にzoomができるといったものではないかと思っております。

事務局（高校教育課）

双方向で配信しながら実施するものですが、授業配信用のソフトがありまして、zoom ですと画面の向こう側にいる子ども達の細かい様子をなかなか見取ることができないところがあります。そういった細かいところまで見取ることができるようなシステムが備えられているのですが、それがうまく機能できているかどうかについて今検証しているところでございます。

田端健人副会長

それなりにコストが掛かっているものでしょうか。

事務局（高校教育課）

はい。基本的に国からの補助で実施しているものでございます。

本図愛実会長

そのほか御意見ございますか。

佐々木克敬委員

ただいま田端委員から御意見があった生徒と保護者が課題として感じていることが学校現場と違うのではないかという話についてですが、このアンケート結果の文言だけ見れば、人間関係が固定化しやすいとか、多様な考えに触れる機会が少ないことについては、従属的な関係ではなく、独立している形になっていると思います。

実際に、小さい小学校や中学校から来て、高校も小さいところに来てずっとグループダイナミクスが固定化してきています。多様な考えというところでは、地域の方々の幅広い年齢と接しているという意味で課題とは思っていないと考えられます。ただ、学校の先生としては、もう少し、他の学校の生徒、あるいは大学生や中学生の関係というところでは、やはり満足感は足りないのかなと思います。私も小規模校に勤務していたことはありますが、そういう子ども達を仙台であったり、東京の大会などに連れて行った場合、なかなか気遅れしてしまうところも見られましたので、そういうところの矛盾感を出ているのかなと思います。

本図愛実会長

ありがとうございます。田端副会長とは別の解釈の意見でした。

そのほか御意見ございますか。

菊地直子委員

地域の実情を考慮した結果、そして中央教育審議会の「様々な教育資源を活用するべきである」というところから、3つの課題を抽出して、その対応策をまとめていると認識しております。もちろん、この方向性は非常に今日的ですし、可能性も秘めており、楽しみとっています。

ただ、提案を遂行するには、点在する資源を有益に取り扱える人材の登用も同時に考えなければならないと思います。御承知のとおり、教育はそこにいる教員が多くを担います。社会の窓となる教員が一定の地域に留まるのではなく適材適所の発想が必要だと思います。

実際、小規模校で仕事をしていた経験がありますが、先生方は新しい取組が入ってくる度にすぐてんやわんやになって、奔走している状況が見えて、精神的にも負担が大きいのが見えました。

既存の問題解決を進めていかないと新しいことに着手しても上手くはいかないのではないかと危惧があります。今回のアンケート調査結果においても、学校から「職員数が少ないため、個々の教員が抱える校務量が多く、職員一人

当たりの負担が大きい」との意見が述べられているので、そういった実態について手当していかななくてはならないと感じます。また、先ほどから話が上がっている ICT 関連の話というのは、これからまだまだ整備されると思いますが、一旦システム化されると修正が難しいということも専門家からよく聞くことですので、こういった土台とかそういったものを含めながら同時に検討された方が良いと思います。

本図愛実会長

ありがとうございます。そのほか御意見ございますか。

この大事な課題について、皆様からこれまでの活動や御専門を背景に御意見をいただきたいと思いますので、千葉委員から順番に御意見でも御質問でも結構ですので、いただけますでしょうか。

千葉真己恵委員

1 点目は質問ですが、先ほどの志津川高校の様々な取組について伺いたいと思います。これらのアイデアは、子ども達が自発的にこういう街づくりをしたいと自ら考えて取組まれてきたのでしょうか。それとも先生方がある程度企画を考えられて、受動的に子ども達が活動されてきたのかをお伺いさせていただきたいと思います。

2 点目は、資料 3 ページの課題だと思われる項目の中で、「⑧多様な考えに触れる機会が少ない」の数字が低く、郡部の方に住んでいる方々は、人間関係が広がらなくても、狭い地域の中では何も問題なくやっていけるという地域性があるのではないかというお話がありました。しかし、高校というのは高校のカリキュラムをただ学べば良いという場所ではなくて、大学進学のための学びの場であり、社会に出るための準備期間でもあると思います。そのような点から、高校時代に多様な考え方に少しでも多く触れることの大切さを、小規模校の子ども達にも分かってもらえたらと思います。

そして、この数値を低いままで終わらせず、少しでも問題意識を高められるような働きかけができると良いと思います。

コロナ禍に入り、県外で一人暮らしを始めた子ども達は、大学の入学式も無く、授業はリモート、部活も中止、アルバイトもできず、友達を作る機会さえなく、新しい土地の狭い部屋に一人ぼっちで何ヶ月も閉じ込まなければならない生活が続きました。1 年後、または 2 年後に対面授業が始まり、大学に通学できるようになった時に、全国から集まる多様な学生達の輪にスムーズに溶け込むためにも、高校時代に人間関係の幅を広めておくのは大切な事だと思いました。実際私も、コロナ禍と同時に県外で一人暮らしをはじめた大学生の我が子の様子を見てみると、幼少期から高校まで幅広い人間関係を築いてきたため、コロナ禍であっても、入学前から同じ学部や同じ部活の仲間とインスタや LINE でコミュニケーションを取り、授業は何を取れば良いかとか、1 年で何単位取得すれば良いかなど、彼らにとっては未知の大学システムの情報交換はもちろんの事、様々な心配事についても励まし合っていたようで、孤独や不安はかなり軽減されていたようです。友達をすぐにたくさん作れたのは、多様な考え方を抵抗なく自然に受け入れられたのも要因の一つだと思いますので、そういう点でも「多様な考えに触れる機会が少ない」ことに問題意識が少ないという結果をないがしろにできないのではないかと思います。

葛西利樹委員

資料 1 の 8 ページには志津川高校の取組例が記載されておりますが、この中の「志津川高校のまちづくり議会」は、2 年生の総合的な探究の時間でプログラムを組んであるものです。従って、生徒は 1 年生の時から「ふるさと南三陸講座」で外部講師をお呼びして、地域のこと、地域の歴史、産業を 1 年間学んだ後に、グループワークで、自分達で「ここが問題だね」とか、「ここを発信したらもっと多くの観光客が集まるね」といったように議論し、そのまとめとして、最終的に 2 年生の 2 月に、南三陸町の議場で町長はじめ、町の幹部の方にプレゼンテーションするものでございます。

生徒の発案から生まれたものとしては、実践的な起業家教育に記載のある「ペヤングのやきそば」、これについては熱心な教員が 1 人居りましたが、いつの間にかペヤング研究会なる非公式な組織ができあがり、それがあれよあれよと

いつの間にか株式会社まるか食品の社長に声が届き、一緒に商品開発をすることになり、今ではサンドウィッチマンのCMが流れるまでの大きな活動に繋がりました。熱心な教員に追随していった子ども達が自分達でアイデアを出し合ったといったところでございます。

今お話をいただいたとおり、本校も小規模校で人間関係が固定化していて、多様な考えに触れる機会が本当に少ないところでございますので、今、お話をいただいたところを本校の教育活動としても生かしていきたいと思っております。

本図愛実会長

ありがとうございます。学校現場の皆様は御発言の際に補足していただければと思います。それでは鈴木委員お願いします。

鈴木洋委員

先日テレビを見ておりましたら柴田農林高校川崎校の生徒が取り上げられておまして、陸上部の競歩大会において、県大会、東北大会、そしてインターハイに出場しました。あの小さな学校からインターハイに出場する生徒を育てた教員が素晴らしいと感じました。

ああいうことができるのが小規模校の特質であり、そして、ああいう先生がいることが誇らしいと思っておりました。今、コミュニティスクールの導入が全国的に叫ばれておりますが、大河原町には小中学校が5校ありますが、今年度からすべて学校運営協議会を設置し、コミュニティスクールとしてスタートしました。高校は地域の子供達だけではなく、他市町村の子供達も入学します。その高校がある市町村の人達は、「おらが高校」、「我が高校」なんです。これは、我が町の仲間なんだと思って迎え入れているんだと思います。そういう意味でコミュニティスクールを県立高校でも導入し、学校を地域の力を借りてなんとか良い方向に向かわせるという視点も必要ではないかと思っております。

先ほど御説明いただきました資料1の4ページの小規模校における取組や運営上の工夫について、3つの方向性は素晴らしいものと思っております。特に2番目の「地域等との連携による学習活動の充実や多様な交流機会の創出」については、各市町村の商工観光課との連携や大学との連携、あるいは企業との連携も深めていただければと思います。

もう1つの視点として、小規模校には配慮が必要な生徒が多く入学してきます。遠藤副教育長も校長として在籍しておりました田尻さくら高校でお話をお聞きした際、小中学校で不登校であった子が、田尻さくら高校に入学した後は毎日通って、元気になって高校生活を送っているといった話を聞き、なんと素晴らしい高校なんだろうと感じました。

先生達は一人一人に応じたカリキュラムに対応するために、時間割表が複雑になってしまい大変かと思いますが、そういう子ども達に配慮しながらやっているところが小規模校ではもっともっと大事にされていく必要があると私は思っております。

一人一人の個別最適化をするためにも1番目の「ICTを活用した遠隔教育システムの導入による学習環境の充実」も必要だと思います。ただ、やはり一番必要なことは先生の情熱だと思います。一番最初に申しあげました競歩でインターハイに出場させた先生、こういう先生がいるとその学校が大きく変わると思います。人事面でも大変だと思いますが、多様な課題を持つ子もいらっやいますので、多岐に渡る教育のシステムを構築していただければと思っております。

本図愛実会長

ありがとうございます。事務局からいかがでしょうか。

事務局（高校教育課）

県立高校におけるコミュニティスクールですが、昨年度から導入されておりまして、昨年度は志津川高校と中新田高校、そして本年度はじめに松島高校の3校が導入しております。数としてはそこまで多くはないですが、来年度も数校導入する方向で現在考えているところでございます。その中の一つとして、来年4月に開校いたします大河原産業高校においても、コミュニティスクールを導入する方向で現在検討しているところでございます。

本図愛実会長

ありがとうございます。それでは、庄子委員よろしく申し上げます。

庄子真岐委員

今回の資料を拝見させていただきまして、小規模校の良さ（魅力）として、「生徒同士、教員と生徒間の距離感が近いため、お互いの信頼関係を構築しやすい」とか、「生徒一人一人の個に応じた丁寧な指導を行うことができる」とか、「部活動や学校行事等において、生徒一人一人に活躍の場がある」とか、「全校による活動や様々な取組を企画しやすいほか、地域に根ざした活動ができる」ことが挙げられておりますが、これから求められている教育が詰まっているような印象を受けました。

一方で、課題についてもすべて解決できるのではないかという印象を受けました。「地域等との連携による学習活動の充実や多様な交流機会の創出」におきましては、本学も大学の中では小規模で地方に一つしかない大学のため、地域で連携活動する機会が多いと感じております。もちろん大学の中では小規模なため、価値観が固定化してしまうところもあると思いますが、地域連携活動を通して世代を超えた多様な価値観に触れることができています。また、地域との連携活動によって、注目され、他大学からもその活動に興味のある生徒が来て、活動をともにするといった世代内の交流が生まれております。地域との連携活動を深掘りしていくと、様々な課題が解決されるのではないかと感じました。

私が活動に関わっているわけではないですが、気仙沼伝承館に取材に行ったことがあります。伝承館で活躍する気仙沼向洋高校の語り部ガイドの活動を拝見させていただいて、活動についてお話を伺うとともに高校生ガイドの方にも直接、取り組みについてのお話を聞かせていただきました。語り部ガイドとして一生懸命活動されていました。同じ世代の高校生や中学生などの受け入れが比較的多いとのことでした。高校生とは、すぐに友達になり、SNSで繋がったりなどその後の交流もあるようです。また、高校生同士だから会話が弾み、そして高校生がガイドをやるからこそ、来訪した学生さんもよく耳を傾けてくれるということでした。地域との連携活動を通して、世代内交流がうまく進んでいると感じたところでございます。

そういった点でぜひ、2番目の「地域等との連携による学習活動の充実や多様な交流機会の創出」を深掘りしていただきたいと思います。

1点目の「ICTを活用した遠隔教育システムの導入による学習環境の充実」についてですが、コロナ禍にあつて大学でもICTを活用した学習を整理しなければならない中で、一番学習効果があったと感じているのは、後で振り返りができることです。双方向の通信でやることはすごく良いと思いますが、それをアーカイブしておいて復習する時に何度も見返せるようにしておくことを検討いただきたいと思います。意欲ある学生は自主的に復習できるため、リアルな授業よりも、非常に学習効果が高いと感じております。

本図愛実会長

ありがとうございます。それでは、佐藤委員よろしく申し上げます。

佐藤新一委員

栗原市の学校はまさに小規模校が多い状況ですので、本日お示しいただいた対応をしていただけると本当にありがたいですし、必要なことだと思っております。特に資料1の4ページの3つの方向性は非常に素晴らしいものと思っております。今日会議に参加して色々とお話を伺って思ったことは、1つ目の「ICTを活用した遠隔教育システムの導入による学習環境の充実」を進める時に、目の前の自分の生徒に対する授業と画面越しの生徒に対する授業に加え、そちらの評価もする必要があり、配信する側の学校の先生の負担が非常に大きくなるという点です。

一部の人の負担になるような仕組みはなかなか広がりづらいと思うところがあります。ICTを活用するのは非常に良いのですが、どんなやり方が良いのか、通信課程とタイアップするとか、評価については、大学の先生は非常に多くの学生を評価しているので、そういった評価の在り方を高校教育に導入できるか、分からない部分はありますが、そういう手法も検討しながら広げていただければと思います。

先ほど庄子委員がおっしゃったとおり、小規模校には非常に良いところもありますので、検討いただければと思います。

本図愛実会長

ありがとうございます。それでは、佐々木委員よろしく申し上げます。

佐々木克敬委員

私も資料1の4ページの「小規模校における取組や運営上の工夫」については賛成です。今から少人数になっていくのはもう事実ですので、こういった方向で学校毎に特色を作るのは大事だと思っております。自分の経験上、他の学校のお話も含めての話になりますが、例えば、「ICTを活用した遠隔教育システムの導入による学習環境の充実」の場合、ただいま庄子委員から話がありましたが、録画映像を用いるオンデマンドで繰り返しという話については、生徒が繰り返し学べるということで利点はありますが、実は双方向性でアクティブラーニング型の授業をICTでやるというのは非常に難しいです。本校でも京都府と交流をやっておりますが、かなり綿密な教材研究と打ち合わせをしなければいけません。逆にそれが授業改善に繋がっているというプラスの面は大きいですが、このようなところをきちんとやっていかないとアクティブラーニング型のICTの活用は非常に難しいと思っておりますので、両方の使い方が必要だと思っております。

地域コーディネーター、地域教育につきましては、北海道では、半分以上の学校が1クラス、2クラスの学校になっている状況と聞いております。その場合、学校としてどんなところで助かっているかという、やはり町からの支援が非常に大きいと話としては聞いております。例えば、経済的な支援では、修学旅行の費用を町が全部負担している市町村もあるようですし、若者不足のため、少ない高校生に色々な負担を大人達がかけてしまうことがありがちだということも聞いていますので、そういった点に気をつけなければならないと伺っております。ですから、地域コーディネーター的な人を誰がどのように雇っていくのか、どういう風に使うのかという視点が必要なんだろうなと思っております。

学校間連携につきましては、山形の小国高校で小規模校サミットを開催して色々な意見交換をやっているようですが、例えばの話、宮城県内の小規模校だけでも、授業の開始時間と終了時間を合わせて時間割を合わせるということだけでも色々な仕組みが変わったりします。どこかの曜日をフリーにして、部活動や課題活動でフリーに移動する曜日を作るとか、大胆な改革を宮城県でもやることもあるのかなと思います。そのためには、教員定数法や予算の縛りがあって、すごく大変だと思いますが、そのような点で少しでも県と市町村の方でお互い按分しながらやっていかないとなかなか大変なのかなと思っております。

本図愛実会長

ありがとうございます。それでは、後藤委員よろしく申し上げます。

後藤武俊委員

1つ質問させていただきます。資料1の1ページ目に「1学年2学級及び3学級規模の学校は、当面、特例校として存続する」と記載されておりますが、これは小規模特認校と意味が一緒なのかお聞かせください。小規模特認校は、小中学校ではよく聞きますが、高校ではあまり聞いたことがありません。島留学をやっているところは小規模特認校であったりするかもしれませんが、ここでいう特例校の意味を確認したいと思います。

もう1点は、先ほどから話題になっているICTを活用した授業における評価の件です。通信になると難しいと感じる部分は、例えば、通常評価する際に平常点などを加味して評価していると思います。大学の場合でも、提出物が提出されているか、発言はされているかといった面があります。この点が、通信で繋いでいる先の生徒達に同じように課すことが難しい部分と感じています。提出物の場合、提出のために何回か催促したりしますが、画面の向こう側で一度も会ったことのない生徒にそれを伝えていくということがなかなか難しい中で、オンラインで繋いでいる生徒を適切に評価することが非常に難しいだろうと思います。

やり方を間違えると、いわゆる通信制課程のような形でカリキュラムをどれくらい習得したかで評価していくということになる恐れがあると思います。そうじゃないとするとどうやってやっていけば良いのかということが非常に悩ましいところだと思いますので、慎重に検討していただきたいと思います。

本図愛実会長

ありがとうございます。1点目について事務局からいかがでしょうか。

事務局（教育企画室）

特例校の意味についてですが、資料1の1ページに記載しておりますとおり、第3期県立高校将来構想の大原則として、1学年4から8学級を目安として適正な学校規模として謳っております。生徒数が減少していく中で、在籍率を踏まえて、学級を減らしていくことになっておりますので、どちらかというと特例的に存続させている高校という意味でございます。

事務局（高校教育課）

評価について御意見いただきありがとうございます。その難しさにつきましては、先ほどもお話しさせていただいたとおりでございます。1点補足させていただきますと、配信側で教員が画面を通して授業を行って、受信側の子ども達はその画面を通しながら、色んな学びを深めていくこととなりますが、受信側の教室にも教員がいます。受信側の教室にいる教員が目前の子ども達の様子などをきっちりと観察して、それを配信側の教員に伝えて、その連携の中で最終的な評価は配信側の教員が行っていくという仕立になっております。

なかなか難しい点があるというのはそのとおりでございますので、本事業は、宮城県だけではなく、全国10都道府県が国の委託を受けて実施しているものであり、国が行う連携会議がございますので、お互いの困り感や工夫などについても情報交換をしながら、こういった形でやるのが一番適切なのか、負担を軽減できるのか、そういったところをお互い模索していければと考えております。今後とも色々と御意見を頂戴できればと思います。

本図愛実会長

ありがとうございます。菊地委員いかがでしょうか。

菊地直子委員

今の評価の話ですが、受け手側に教員がいて、情報交換をしながらということになりますが、そうすると、先ほど佐藤委員がおっしゃっていただきましたが、負担をどういう風に分散していくかという視点が大事になると思います。

大学でオンラインの授業をどういう風に評価するのかについてですが、私は300人の授業を3本持っていて、オンラインでやっておりますが、はじめに配信して、チャットで学生とやりとりをして発言内容を補足しながら授業全体を進める反転授業のような形を取っております。そうすると、あらかじめ学生が何を考えて、何を疑問に思っているのかが把握できます。評価の面ですと、通信教育みたいになりがちだとは思いますが、佐々木委員もおっしゃっていましたが、教員はやっているうちに授業改善に繋がります。伝えなくてはいけないポイントが明確に伝えられているかとか、そういう視点も取り入れても良いのかなと思います。しかし、やはり教員の力量や情熱が鍵となってしまうがちで、負担割合も含め、そこに頼るようなシステムではいけないと思っています。

オンライン授業の場合、先生方の得意、不得意があり、不得意の場合かなりの負担になってしまい、実際にかわいそうだなと感じた経験もあります。なかなか難しいと思いますが、得意な先生を適切に学校に派遣するとか、そういう人材の面も検討していかないと、せっかくの良いものが使い切れないことになってしまうので、考えていただきたいと思います。

本図愛実会長

ありがとうございます。菊田委員いかがでしょうか。

菊田英孝委員

本校は県内唯一の公立の通信制の高校となっております。先ほども少しお話を挙げておりましたが、小規模校と通信制高校の連携という話が出てきましたので、そこに関してお話をさせていただきます。参考資料1の1ページに、小規模校に入学する生徒の特徴や傾向等として、学校の主な回答内容として、「中学校までに不登校を経験している生徒が多い」、「自分に自信がなく、自己肯定感が低い生徒が多い」、「コミュニケーションが苦手な生徒が多い」、「家庭生活が苦手な生徒が多い」、「家庭環境に問題を抱えている生徒が多い」、「発達障害を抱えているなど、支援を要する生徒が増えている」などが回答として挙げられておりますが、ここで挙げられているような生徒は本校にも来ております。

本校は1,000名を超える生徒が在籍しておりますが、ほとんどが、先ほど説明した特徴等を抱えている生徒達です。

生徒の特性に応じた色々な学びの在り方があると感じていて、小規模校でも、こういった生徒達が高校に入学してきて、先ほどから話が挙がっているICTを活用した遠隔授業や地域との交流といった学びを展開した時に、どうしてもそこに馴染めない生徒がおそらく出てくると思います。

そのような生徒をどうするかというと、先生達はきめ細く指導なされると思いますが、結果として学校に来られない状況が生じてしまって、例えば、原級留置とか、進路変更で中途退学といった結果になってしまうことが想像されます。その時に、美田園高校の通信制課程を活用した併修制度を利用してもらえればと思います。これは、学校教育法の施行規則の中で、学校外での学修単位を、在籍校において当該生徒の卒業単位に含めることができることが規定されており、それに基づくものです。

今年3月に県教育委員会が「通信制課程を活用した併修制度による単位認定に係るガイドライン」を作成しておりますが、現在、これを利用して、県内4つの高校と学校間連携をしながら、生徒が在籍をしながらして、美田園高校の科目を履修するという形で、今22名の併修生が取り組んでいるところです。

その中の学生で、たった1科目の単位が取れずに卒業ができないかもしれない生徒がおり、その1科目を美田園高校で履修するよう頑張っているところですが、見通しとしては、多分取れるだろうという状況になっておりま

す。本人も卒業が意識できるようになってきて、本校に入学した当初は進路目標が未定になっていましたが、最近になって高校卒業後の進路もだいたい見えてきて、非常にやる気を見せてきていると伺っております。

そういったところで、本校の通信制課程を使った併修制度はすごく有効と感じています。小規模校においては、資料1の3ページで、「人間関係が固定化しやすい」といった課題が挙げられておりますが、トラブルになって解決に時間が掛かってしまうという状況になった時に、本校の通信制課程を使った併修制度により単位を取得することができれば、自分が望んだ高校を卒業できるというところに繋がっていきますし、単位が取れることによってまた学校に戻れるというケースも出てくると感じています。小規模校の学びを考えた時に、単位制の本校の科目を併修制度によって履修し、その単位をその学校で認めてあげるということも含めて、取組の中に盛り込んでもらえると非常に良いのではないかと感じています。

ただし、通信制課程の学びは自学自習と自己管理になってきますので、レポートをやって、スクーリングに来て、テストを受けて合格するという3段階になりますが、距離が遠くなってしまうと、スクーリングが大きな壁になってくかなと感じています。本校はアクセス線を使うと駅の目の前にあるため、登校しやすいですが、距離が遠い場合は、なかなかスクーリングするのも大変という実態があります。現在、美里町で地域スクーリングということで、美里町のコミュニティセンターに本校の職員が出向いてそこでスクーリングをやっている事例もあります。だいたい10%位の生徒達が県北の大崎、栗原といったところから来ていますが、美里町でやることによって、そこにスクーリングに来て、スクーリング時数を満たしていくということが行われています。

小規模校の学びを押し進めるに当たって、スクーリングの拠点となるようなところがもう少し地域にあると生徒達の救済に繋がっていくのではないかと感じています。本校は職員も少ないため、すべての地域に出向いてスクーリングすることは厳しいものがあるため、その時に、地域の学校、定時制でも良いですが、学校がスクーリングの場所となって、その先生方が美田園高校の教員として兼務するような形でスクーリングができれば、学校を辞めなくて良い、留年なくて良い生徒がもう少し増やせるのではないかと感じているところがありますので、併せて御検討いただければと思います。

本図愛実会長

ありがとうございます。片瀬委員よろしく申し上げます。

片瀬弥生委員

今日の説明資料で改めて各学校で色々な取組をなされていることが分かりました。高校との関わりでは、就職の目的などお越しいただいていることはありますが、インターンシップとなると数が減ってしまうところがあって、実際のコミュニケーションが取れているかというところとちょっと寂しい状況かと私自身思っております。

小規模校の色々な話が出ておりましたが、本音の話をすると1学年15人から20人の小さなくりの高校ができて良いのかなと思います。はっきり言うとコミュニケーションができない子ども達が増えていきます。無理矢理コミュニケーションをしようとすればするほど病気になったりだとか、かえって苦手になったりとかということもあるので、もう少し自由にしても良いのではないかと感じていました。仕事をするという段階になった時に、色んな意味で弊害が出てくると感じています。

今期大卒の社員が入社しました。コロナ禍の中で2年半ほどコミュニケーションを取らないまま卒業して就職されたのですが、考え方はすごく素晴らしいものを持っているのですが、コミュニケーションがすごく苦手でなかなかそれを表現できないというところで、表現をどういう風に育てあげたら良いのかと感えている間に心が折れてしまったという大変残念な結果になってしまいました。

教育の専門家ではないので、どの段階で気持ちの醸成ができるのかは分かりませんが、人のくりを広げ過ぎるのもあまり良くないのかもしれない。かえって小さなコミュニティの中で信頼できるメンバーと結びついてもらった方が人間に対する信頼関係も育まれてくると思っております。反対に言うと、広いところだと、孤独感を感じるということもあり得るのか

など感じております。

資料を見て、就職のことや将来の仕事のことを考えていただいているのは、企業側からすると非常に嬉しいことです。

県内で仕事をすればこれからの県を支えていくメンバーになるかと思っておりますので、ぜひ地元の方とのコミュニケーションをもっともと取れるような状況になっていただければと思います。

別の話になりますが、本当に極端な科目を考えていただいても良いのかなと思います。勉強以外にも色々なことをさせないといけないのは良いと思いますが、プログラミングならプログラミングに特化した学校があっても良いのではないかと思います。専門学校とバッティングするかもしれませんが、実質的に専門学校に入るには高校に入学してからになると思います。企業としては今生産性の改善が第一優先で挙がっておりまして、ロボットを動かすとか、通信のデジタル化を進める時に対応できる人材が必要です。極端な話、高校を卒業して、専門学校で1年間もしくは2年間学習して入社することになっても、既にできあがっている状態に乗せするので、あまり深く専門家になれません。本当を言うと、中学校と高校の時にそういう専門性を身に付けることはすごく大事なことはないかと思っておりますので、そういう高校もあっても良いのではないかと思います。別に学校の校舎とか、体育館に拘らず、極端な話、マンションの一室でも良いぐらいの感覚を持っていただきたいと思っております。ただ、コミュニケーションのところだけはどうか分からない部分もありますが、一方向でも発信できる人間になれるようになっていただければと思います。アンバランスになって申し訳ないですが、できれば色々な人材を育てて欲しいというところが一番です。

本図愛実会長

ありがとうございます。採用側の貴重な御意見でございました。葛西委員よろしく申し上げます。

葛西利樹委員

ただいまお話がありましたが、産業界の方々も学校の方と結びつきを強めたいという思いを持っていらっしゃると思います。会社の人事担当の方とお会いすると、こういうことをやってみたい、もっとあの高校と色々組んでやってみたい、ただ、どうやったらよいか分からない。あるいは、どのようにアクションを起こしたら良いか分からないという話を聞きます。

高校も産業界の方と結びつきを深めて色々なダイナミックな活動をしていきたいといったところがありますので、そういったところでは、資料1の9ページにある「(仮称)気仙沼学びの産官学コンソーシアム」のような取組がもっと広がれば良いと思っております。また、私は前任校が石巻の方でしたが、そちらでも東部地方振興事務所が音頭を取って、その地域の事業所と高校と一緒に一つの物語になる商品を開発するプロジェクトを立ち上げており、そういった学びもすごく面白いなと思っておりました。

今後、地場産業を担う地域の担い手をどのように育成していくか検討する中で、その中で小規模校が果たす役割はもっともとあるのだろうなと思います。特に南三陸町は宮城県の中では1番の消滅可能都市という状況になって町も非常に危機感を持って、平成28年から協議会を立ち上げて、どうしたら良いかということで高校の魅力化に取り組んできたところです。小規模校の問題は地方創生の問題と直結している問題であって、そういったところも含めながら、先ほど申し上げたような「(仮称)気仙沼学びの産官学コンソーシアム」や佐々木委員から発言があったような地域コーディネーターの設置などの方策をぜひ県の方でも考えていただけるとありがたいと思っております。

本校の悩みとして、多様性にいかに触れさせるかということもありますが、一番は競争心を抱かせることです。どうしても小規模校は人数が少なく、競争し合うという意識が低くなってしまい、自分はこれぐらいで良いとなってしまいます。本当はもっと高いところまで行けるけども途中で諦める形になってしまうので、競争心をどのように付けさせたら良いかということもあって、今町と県教育委員会に御指導いただきながら、全国募集に取り組んでいるところでございます。

本日の会議で委員の方々からもたくさんの有意義な御意見をいただきましたので、今後の学校運営に生かしていきたいと思っております。

本図愛実会長

ありがとうございます。猪俣委員よろしく申し上げます。

猪股智秋委員

アンケートの結果、3つの取組の方向性、そして委員の皆様のたくさんの御意見をお聞きして、私自身多様な考えに触れたと思っております。私は義務教育の立場ですが、今の話を聞いて思い出したことが2つあるので、お話をさせていただきます。

1つ目の話は、小学校の話です。3年前に徳之島の小学校に視察に行きました。徳之島は小さな学校しかなく、全部が複式学級です。その時に双方向のICTの授業をしていました。複式学級のため、5年生と6年生が1つの教室にいて、1人の先生に教えてもらう、つまり、6年生が授業していれば、5年生は問題を解いている状況です。それを隣の学校と双方向で遠隔授業をしていました。Aの小学校の先生が5年生の授業をして、Bの小学校の5年生とICTでつながる、Bの小学校の先生が6年生の授業をして、Aの小学校の6年生とICTでつながるといったスタイルを見ました。非常に貴重な経験でした。どちらが活気のある授業をしているかという答えは歴然ですよね。目の前に先生がいる子ども達は生き生きとして、画面上の先生に向かって授業をしている子どもたちは、あまり活気がない状況でした。人の力ってすごいと思いました。今の話を聞いた時に一方からの授業の配信だけではなくて、例えば時に逆転してみても、向こうの学校の生徒はこんな風に授業をしているんだということを感じられれば、そういうことが評価の改善になったり、広がりができたりするのではないかと思います。

2つ目の話は中学校の話です。不登校生徒が安心して通級できる「学び支援教室」というのがあり、そこには、専任の担任の先生がいます。不登校気味の生徒が小学校から上がってきて、中学校の生活に慣れ、エネルギーが溜まってきたら、中学校の授業を見たい、でも教室には入りたくないと言っていました。そこで理科室と「学び支援教室」をICTで繋いでみたところ、初めて聞く授業なので引き込まれました。授業をやっている教員は、目の前に生徒がいる中で、iPadで配信していますが、目の前の生徒に夢中になると、受け手の生徒のことをつい忘れてしまいます。

受け手の生徒は、「これね」って見せた時の手元が見えない時がありました。そこで変化が起きました。便利さの中の不便さが良い方向に展開をして、後ろなら授業を見たいという気持ちになりました。ICTで授業を配信するだけでも、子どもにエネルギーがあれば活力に変えられると感じております。

資料1の10ページに芸術鑑賞会等の合同開催とありますが、例えば、ここで素晴らしい演劇を見た時に、いつか本物の演劇を見たいと感じてくれることもあるかと思います。活力を生み出すきっかけをまず作ってあげるといったことも大事ではないかと思います。

本図愛実会長

ありがとうございます。伊藤秀雄委員よろしく申し上げます。

伊藤秀雄委員

資料の中には、当面小規模校を存続するという記載がありますが、当面存続させるだけの理由が必要になってくると思います。どこの県も予算の配分という問題もありますので、現実的な背景としてそういった問題もあると思います。一方で、残すべき相当の理由がそこに作れば、残していくべきと思っております。委員の皆様からも御意見がありましたが、小さくなければいけないこと、小さい方がやりやすいことがあるような気がします。そういった意味では、ある程度残すべき方向性や価値をその学校にいかにか与えられるかというところを協議していただきながら、あそこの学校はこういう学校だから残すべきだとか、遠いけれどもその学校に入れたいとか、そういった魅力ある学習カリキュラムがあると良いと思いました。

地方にある学校が小規模校になってしまうと思いますので、そうした中では、地域産業を担っている我々にとっても地域に若い子どもがいることは高校を卒業すると就職ということもありますが、登米産業総合高校もそうですが、地方の高校を卒業すると、関東などの県外に出ています。コミュニティスクールをはじめとして、登米産業総合高校の設立から関わらせていただきましたが、地域との連携をはじめとする地域の企業や住民との触れ合いなどの取組は小さい学校であればあるほどしやすいし、地方であれば地方の産業の担い手として価値があるのではないかと思いますので、ぜひ小規模校に対する存在意義をしっかり方向を付けながら、計画的に育成していただきたいと思います。

本図愛実会長

ありがとうございます。伊藤宣子委員よろしく申し上げます。

伊藤宣子委員

志津川高校の取組を見させていただきまして、地域が好きなんだ、人が好きなんだ、教育の物語が始まったと、とっても嬉しい気持ちになりました。

地域が好きということが教育を盛り上げていく、そしてできることすべてやろうという意気込みを感じさせていただきました。高校だけではなく、地域が好きなんだから、中学生と高校生一緒になって、「おらほの学校を作ろう」とそういう意気込みを大人達が子ども達に示そうとしていると感じました。

そして様々な取組に挑戦していることがすごいと感じました。また、国内だけではなく、海外にも目を向けて、そこから吸収するものが何かを考察に入れているところも志津川高校の将来展望も垣間見させていただきました。

全国募集を契機として、無いものを諦めるのではなくて、無いものを獲得するためにどうするのか、これはやっぱり、人が好きじゃないと、子ども達が好きじゃないと、教育が好きじゃないとできないなと思いました。そういうところでは、見事な志津川高校のわくわくするような教育を垣間見させていただきました。

ICT、GIGAスクールといったことが言われておりまして、子ども達を一人も取り残すことない学校教育のためのオンライン授業、素敵な言葉だと思います。でもそうじゃないと私は思います。

ストレスの非常に多い昨今、若者達もクリニックに通わなければならない、そういう専門医の手助けも必要な子が増えつつあることを私も私の学校で感じております。お医者さんの診断書で「オンラインの授業をお薦めします。」と記載されていると何とかしてあげないといけないとなります。

自宅でのオンライン授業は形としては授業を受講しておりますが、取り残された感、自己喪失感が非常に強いと思います。ですから、登校訓練をさせながら、段階を踏んで教室に戻してやるといったルートを考えています。授業が始まれば、図書室のブラウジングルームに人が居なくなるので、そこでオンラインで授業を受けさせ、空き時間の先生はブラウジングルームに行って一緒にその授業を受けたり関わってもらう、子ども達も教室にいつか戻りたいという気持ちが高まっていくと、ずっと教室に入っていきける。

それができないということであれば、菊田委員のお話にあったとおり、宮城県全体が協力校になって、若者達を18歳にしようということなのではないかと思います。

本図愛実会長

ありがとうございます。浅野委員よろしく申し上げます。

浅野直美委員

委員の皆様のお意見を伺いして、私自身勉強になりました。地域の中の学校といたしまして、小規模であっても学校が存在するということは地域にとって大変ありがたいことだと感じております。また、生徒と保護者につきましても、シ

ンプルに遠くの学校に行かなくて良いという部分で、経済格差が教育格差に比例しないためにも、地域に学校は絶対に必要でございます。また、一人一人の生徒が自主的に活躍できる、より生徒の声が反映された構想でありたいと思っています。学校間連携による課外活動の充実」につきましても、一人一人の活躍の場などといたしまして、重要な時間であると考えられます。学校間連携で十分に生かしていく上では、その学校の単独性や自主性であったり、カラーですか、生徒の愛校心についても尊重した連携となるよう期待するところです。

本図愛実会長

ありがとうございます。田端副会長よろしく申し上げます。

田端健人副会長

参考資料 1 の「県立高校に関するアンケート調査結果」ですが、1 ページ目の小規模校に入学する生徒の特徴等といたしまして、菊田委員から説明のあった部分ですが、これが地方の小規模校に行っている生徒の特徴だと思われます。自分の学力を踏まえて入学してくる生徒が多いとありますが、その部分のイメージについて、生徒と保護者のアンケート調査の結果において、数字の裏付けがされたことになろうかと思えます。

参考資料 1 の 6 ページの学校選択をした際に、どのようなことを重視していたかについては、自分の学力レベルを選択した回答割合が高いですが、これは学力に自信があってその学校を選んだわけではないと考えられます。

参考資料 1 の 7 ページでは、入学時点で学校に期待したこととして、「④地域づくりなど地域の活性化につながる学び」、「⑤世界で活躍できる人材育成につながる学び」、「⑥パソコンやタブレットなど情報機器を使用した学び」、「⑦実践や実習活動など体験的な学び」、「⑧海外研修を取り入れた学び」、「⑨企業研修を取り入れた学び」などの回答状況を見ると、色々なもの挑戦しよう意識はあまり無い中で、むしろコミュニケーションも苦手だし、パソコンや海外にも関心がない、実験とか、実習などの体験にも関心がない。逆に言うと、学力に自信がある生徒の場合は、今言ったところに非常に多様な関心を持っていると思います。それとは対照的な生徒が小規模校に入学していることから、やはり、高校に入ったところで、人間関係のスキルを上げて、多様な価値観とか多様な人にもっともっと触れたとか、もっと色々なスキルを身に付けたいとか、あるいは世界に目を向けたいという風にして送り出してあげるような将来構想が必要だと私は思います。

参考資料 1 の 9 ページの問 6 では、「⑧多様な考えに触れる機会が少ない」の回答割合が低いですが、これは少ないという自覚がないのか、多様なものに触れなくて良いあるいは触れたくないのか、あるいは現在、小規模校で触れている中でも十分というメッセージなのか。「⑨社会性を育みづらい」の回答割合が低いことについては、今身に付けているもので十分だと感じている部分が出ていられると思います。一番の問題は、「①人間関係が固定化しやすい」の回答割合が高いことです。参考資料 1 の 3 ページの小規模校の課題として学校から挙げられている内容だと、固定化とトラブルという言葉が厳密に結びついていることからすると、この固定化は必ずしも良い固定化ではありません。

資料 1 の 14 ページに小規模校の在籍状況が記載されておりますが、少ないところで、蔵王高校と柴田農林高校・川崎校が全校で 60 名、南郷高校は 52 名となっておりますが、50 名から 60 名いる中で固定化が起こっていることは学年間を超えた交流をあまり積極的にしていないことですし、そもそもコミュニケーション能力が低い生徒だから多様にできない部分もあるかと思えますので、そこを 3 年間で押し上げられていないところが非常に大きな問題かと思えます。人間関係の固定化は個々のケースになると非常に深刻で、悪い人間関係から抜けられない逃げ場がないということでもあろうかと思えます。やはり、小規模校の先生方の意識改革の方にメスを入れるようなものが必要かと思えました。学年を超えた交流や、地元の小学校、中学校とか含めれば、小規模校と言えども人間関係が広がるはずで。

ここをもっと大胆に人間関係を多様化させられるような手を打つべきだと思います。そしてそのためには、志津川高校が

1つのモデルを示して下さっているように、地域での努力によってそのところを大いに変革できる、そして個々のケースとしては、小規模校のサクセスストーリーは耳に入っています。しかし、この数値としては、集団として、小規模校全体としてはそれがまだ実現していないという認識すべきであろうかと思います。志津川高校の取組についてもペヤングの企画も1人の熱意のある先生が取り組まれたとおっしゃっていましたが、もちろんそれもあると思いますが、志津川高校の場合は、葛西委員や地域の危機感を含めて、3、4年に渡って取り組んできている土壌がある中で、熱意のある先生が活躍できていると思います。組織のトップや地域の鍵となる人がタッグを組んでそして学校の教員組織、あるいは一人一人の教員の意識改革、小規模校で何が本当に必要な取組なのか、大規模校と違うような積極的な取組だとか、贅沢さといったようなものがあると思いますので、そのところに手が届くような構想にさせていただきたいと思います。例えば「みやぎDUAL-COREハイスクールネットワーク」につきましても、小規模校同士を結ぶだけではなく、大規模校や大規模校の有名学校の教員の数学の授業が一連で聞けるとか、参加できるとか、そういったような試みもあるかと思います。そういう意味で、積極的にさらに取り組んでいただければと思います。

本図愛実会長

ありがとうございます。最後に私からも2つ発言させていただきます。

1つは、教職がブラックと言われて学生が逃げてしまうようなことでは困りますので、高校で働きたい、中学校で働きたい、小学校で働きたいと思っていただけるように、学校自体が魅力的になることが重要だと考えております。今日の話と連動していて、高校のところだと、一般財源化なので、定数の配分についてもやや研究的なところも義務教育よりはできるのではないかと思います。面で定数を考えていくような、この地域で音楽の先生がいたら、その先生はオンラインも含めてこの地域を担当していくといったような在り方も研究の中に入れていただければと思います。

もう1つは、本日は小規模校における学びの在り方ですが、私が勉強させていただいたところで、仙台第三高校とか、仙台二華高校とか新しい学びが成立していると思います。三高には私の生徒もお世話になっていますが、自分の子どもを三高に入学させたいと言っており、それくらい一緒にお世話になった学生にも先生達のいきいきさとか、子ども達の充実が目映っているのだと思います。そういう学校ができる根底は新しい学びが成立しているということだと思いますので、本日の小規模校における学びの在り方も、示していただいた3つの方向性で大変ありがたいと思いますが、そもそも新しい学びだという突破口になっていくようなものをぜひ一緒に考えさせていただきたいと思いました。

それでは、事務局に進行をお返しいたします。

司会

限られた時間の中で貴重な御意見をたくさんいただきありがとうございました。

本日、お時間の都合でお話いただけなかったことや、さらに御助言いただけるような内容がありましたら、電話やメールなどで結構ですので、事務局宛てに御連絡くださいますようお願いいたします。

次回の審議会についてですが、冒頭で伊東教育長からお話させていただきましたが、「新たなタイプの学校」について、検討状況を御報告させていただくとともに、みなさまから御意見を頂戴したいと考えております。

時期としては、11月中旬頃を予定しておりますが、具体的な日程につきましては、委員の皆様にご日程を照会させていただいた上で、会長と相談させていただき、できるだけ早く御連絡したいと考えておりますので、よろしく願いいたします。

それでは、以上をもちまして「令和4年度第1回県立高等学校将来構想審議会」を閉会いたします。

本日はお忙しい中御出席賜りまして、ありがとうございました。